

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成25年 6月20日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 教育学研究科

職 名・学 年 博士後期課程2年

氏 名 荻原祐二

助成の種類	平成25年度・国際研究集会発表助成	
研究集会名	12th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences	
発表題目	Does Globalization Decrease Happiness in East Asia? A Cultural Psychological Pe	
開催場所	Germany, Bad Homburg, Werner Reimers Stiftung	
渡航期間	平成25年 5月17日 ~ 平成25年 5月26日	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()	
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円
	使用した助成金額	200,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳	参加費： 6,200円
		渡航費：167,800円
日当： 26,000円		
以上		
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) この度は、助成を頂き誠にありがとうございました。助成をいただいたことで、国際学会への参加、発表、ディスカッション等行うことができ、非常に充実した時間を過ごすことができました。助成の方式や内容は大変満足できるものでしたので、今後の助成に望むことは、助成事業を続けていただくことのみです。	

平成 25 年度 京都大学教育研究振興財団
国際研究集会発表助成
成果の概要

京都大学教育学研究科
博士後期課程 2 年
荻原祐二

【会議の概要】

参加研究会名：12th Meeting of the German-Japanese Society for Social Sciences

開催期間：平成 25 年 5 月 21 日 ～ 平成 25 年 5 月 23 日

開催地：Germany, Bad Homburg, Werner Reimers Stiftung

本会議は、“Interdisciplinary Aspects of Well-Being in Changing Societies”をトピックとし、様々な学問分野の研究者が最新の研究成果を報告・議論することで、変容し続けている社会における幸福感についての知見・考察を深めることを目的としていた。幸せとは何かについて考え、幸せな生活を送り、幸せな社会を作るには何が必要かを明らかにするためには、単一の学問分野を超えた学際性が必要である。本会議は、それぞれの領域の研究者のみでの開催ではなく、社会学・経済学・法学・心理学など様々な分野の一流の研究者が参加し、議論を行ったことが特徴的であった。

【得られた成果】

この度の国際会議に参加することで数多くの成果を得ることができた。

まず、国際会議において英語による口頭発表を行うことができた。大学院生にとって、国際会議における口頭発表を行う機会は少なく（ポスター発表は可能）、今回が私の初めての機会であった。練習の成果もあり、自信をもって首尾よく発表を行うことができ、オーディエンスからも高く評価していただき、更なる自信を得られる経験となった。

さらに発表だけでなく、発表後のディスカッションも精力的に行うことができた。先述の通り、本会議は社会科学全体から社会の変容と幸福感について検討するものであったため、心理学以外の領域の方々との議論は大変実りのあるものであった。社会変容と幸福感の関連といったトピックを考える際には、心理学だけからではなく、広い視野を持って社会学や経済学など社会科学全般から俯瞰的に見ていく必要があると強く実感させられた。同時に、他の社会科学の分野からでは不可能であり、心理学だからこそできるアプローチを探求していく必要があることも痛感した。

また、新たな研究者のネットワークを築くことができた。特に、本会議の主催者のひとりであった University of Konstanz の Prof. Gisela Trommsdorff やドイツ日本研究所の Dr. Carola Hommerich、法政大学の徳安彰先生、玉川大学の小林亮先生とは今後のインタラクションの可能性も含めて、様々な話をすることができた。今回できたネットワークを活かして今後の研究に役立てていきたい。

ドイツ文化（ヨーロッパ文化）を肌で感じることもできた。文化・社会と人間の心理・行動の関連を明らかにしようとしている私にとって、実際に日本と異なる文化・社会に身を置き、その文化や人々を観察することは、論文や書籍などを用いたテキストベースの研究活動では得られない大変意義のある経験となった。これまで、主にアメリカを訪れることが多かったが、新たにヨーロッパの歴史の厚みを感じることもできた。

【研究報告の概要】

私は、本会議において“Does Globalization Decrease Happiness in East Asia? A Cultural Psychological Perspective”（京都大学こころの未来研究センター内田由紀子准教授との共同研究）というタイトルで口頭発表を行った。

グローバリゼーションが東アジアの人々の幸福感に与えるネガティブな影響について、文化心理学のアプローチを用いて検討した。

主に欧米文化によって育まれてきた個人主義的制度・価値観は、グローバリゼーションがもたらす主要な要素のひとつである。現在の日本社会では個人主義傾向は経時的に上昇しているが、日本における個人主義は、日本人の幸福感の基盤である他者との関係性を切ることによって成し遂げられ、結果として幸福感を低下させている可能性が主張されている。そこで、個人主義的環境が幸福感に及ぼす影響（研究1）と個人主義傾向と幸福感の関連（研究2）を検討した。その結果、日本において、個人主義的環境と個人主義傾向はともに対人関係の不振を通して幸福感を低下させていたが、アメリカにおいてはこのような結果は見られなかった。これらの研究を通して、グローバリゼーションが個人の幸福感に及ぼす影響について考察した。

発表後のディスカッションにおいては、「個人主義傾向」という枠組みは非常に大きくなりすぎており、どういった変数を用いるかによって結果が変わってくるのではないかとということが議論された。さらに、もしアジアにおいてグローバリゼーションが人々の関係性の希薄化を招き、幸福感を低下させるのであれば、今後どのように対応すべきかということも焦点となり、大変意義のある議論を行うことができた。

【謝辞】

本会議に参加することで、他では得られない大変貴重な経験を積むことができました。今後の研究生活にとって非常に重要なものとなったと確信しています。この貴重な機会を得るにあたって助成をいただきました京都大学教育研究振興財団に心より感謝申し上げます。